教訓
繪入

孔先生義

紀行六

口9
1028
18

口9
1028
18

宮城県図書館蔵

古賢鑑紀行巻第六

目録

鮑女宗　列女伝
蔡人妻　同上
李德武妻　音耽列女伝
紙裳探題妻　女郎花
洛陽青士妻
妻名氏婦　古今集
大和國婦　同上
下野國婦　大和物語

附　吉田兼光妻　撰集抄

大和國婦　同上
吉野郡婦　砂石集
云名氏婦　同上
常陸國婦　同上

比賣鑑紀行卷第六

紀行第六

此卷より下は貞女列女のゆゑ文をもとゝすかくちゐ
小学明倫の夫婦の別乃ゆゑをこなへうあとふるずゝ
ゐ乃事おかきあらはしたゝその類ゆゑをこゞひくゝとき
ゐゝ孫ゝ
いかゝ〳〵絶女家といひろは宋の鮑襲が妻なりその志ゝあに
ゐゝしゝてゝくつゝ人ゝゝ。鮑襲いかくく衛のあるゝやはゝ人し
すゝでよゝてゝせゝりゝなりゝれゝばゝそゝこゝをを妻ゝとゝりゝてゝすゝゝきゝり
女家ゐゝゝゝしゝうゝどゝつゝも孫ゝゝげゝなゝりゝ人ゝをゝあゝくゝゝゝゝあに

巻しけるをうたてやうみてゆきくのたりまへ範藤よ
おとづまつうの妻よりも拙ちくりてるさけいとあさうびうに
その方あるりしもの女房とそくれてぶりいろひさうへあ
ぬくくひあるべきういとハいたりやいつとうぎりるどさへうれど
こうへていくく女ハてびのちぎりをうへどまれしてもみ嫌もるり
彩だぐ衣食といるこてまおよはたへ男姑とあかうへ代
はとめこと二をとらあを貞とふくへまさへと順とへ
おこの雪とりさまふすうぎうはるりこもいこんやぞを
れこれ女とへてくるり天まハ十二人紙候ハ九人たまへ三人士
ハ二人なりまどめハ六るまだ二人ハあるべさぞやそのへ女

人よりそこれあくあたりるくおこへもうる業ハもつも
りどりまれ神さここそ七りのとがれくじめこふもるり
なるまぞまハうはぬまびあるるものあまもむさりう
ここそ和まハもありまこへあるあきたびりてへよすこる
あきさるきをこそあびそのふハ俗のくあるよう待るこそつるう
こうるうどいるくこうこあるをこりなくぞはへうる業ぞ
ここうめこはくぬうくゆんびありそしハ世のあたるこへ
ぬりりこそをと女房とふと号せこれそのぞとるるこてひへ
させまへり。ぬへてびへよかるるこてはハ二ハあくこうはう
せ衣食のうこ代はとめくこうこあよ巻巻しおこ

こあぐいひりて秋まハけ〳〵ともいさこうそ秋こかうハふる
うれべきこと〳〵うり女房ぐあとじいとあさこうるわ。こにちの
きとまりるゆ貞一よ人よまぐうるゆ乗物るハうりの
うかめとすう西なりうりくちりひてうくもれうちをべし
いあり人家のくうまこのむもあよ蔡のおいのじの妻こうきう
あり。そのれとこあり〳〵さやまひとうあうり。妻乃母あさまり
くうりとありひろしだちぎりとくくあとうよわくせんたんむ
ちあ乃いとくまの不幸ひすかこううぐ不幸なり。おぐやのが
おくたあり〳〵人。女てうびひ人よんてハ。男ちくうまでよあり〳〵たちび。
うの人不幸みてやまひあまでとうう成りあくく我とやら

ふこともなきにおどろかされてすてらるべきにいひてそづぬに
母のすゝめにまかせてかゝハさりしなり。此人丈夫ハ一旅の弟おと
おばおとこれをつかうまつりて女のこゝろしくあらんあるまじ
きこゝろをあらくきこえまへ志をまもりておこゝれおしとやまひと
ものやまひとハおりひかしなんいとゞさびしがにいゝぞせうか
唐の李徳武が妻の裴氏ハ安邑公のむすめなり。
字ハ淑英といふ。うちもゆかしくやさしく文章を学ばれさこ
えあり。徳武よつぎてとつぎてのちすくはるべきに、徳武ハ
つかありて南海にながされける。裴氏が父おかやけよりてその中
をさきいましめてとゞめしかバ、徳武妻ハなべく時におさへ

そのちぎりハ平なりしかバ我ハたとくさえへとひらかえさせてひろ
くたゞしへゆきなバ、こゝろざしくらをとゞむべからず。おとこハ文の心よ
きてかひて父のかなしへんをもすまへきそそへかつてきよりまよ
とよらくけまハ裴氏なくくここへていたく安てひまよつへ
てとめてび嫁するなかし。史ハ是なれバなどかそのむきそのかれ
名をも猪かりくろ命をうけてかなしむとこゝへかなんとそのき
かせとり耳をきりてちかひなしにあらぬともしてもはなきかり。
かくて徳武とよれたくなりちゝのりとかぬけるが、そのうちやとを
てまつちとちさこゝのでやつまつる屋にまかれて獄中にかくうち
ほみて目をおくまつり父おがうやめぐぶ徳武がめをいかへその

ゝく人ありくるしくひゆるりとおくぶろやぞせさまおせりむかう
しの列女傳をよみて女のちぎりをあしたゞめぞるはあまたゞ二庭
をゆまざるは人のつとめなるにおぼつかなくしくまゝ
しかして入けるとそおぎさことろやわりそのくちすいせぞすずれ
まで魏武はとゝづきてそびれせざれば父いかにそてある人にゆにし
くや目ともむゝかそよあさゝれどもぶつりし髪とおしまうか
さうれしくて妻とさ入べくさんそれやゝふかりり魏武
あるかこんそ列け妻となりひとくねけるが叔によひく妻を
つき後てよ入りけるは名まて裴氏が部とまりけるをはる
しより媛の妻と入りてふたゝび裴氏とのりとのまゆぞなり

まけるぶ人ありせしはちぎりあさくて年久しく遊ぶらねおとこへ
そののちくまをわづて父の志ゐけるはさせれなりしに貞んなむ
れずとわくつゆうり人ふまかし。ひとものやられかぞし。徳とれ
いひくらふるさたえてなり。中にもおとこまさそりてより。かへらち
とほてどうる。女はそのまゝ衣よりもぶりのためよろちづくを
もとりふゆるとくおりひにもくりや。毛詩に衛が共せしより
かゝべとぶより紀れごやし。およびづもより鄒淫なるきんや。誰
とおもひてかくらはくをせんとも比ありる。備とれおとそ此
実なり。おとこの軍にあちて東のかた入ゆきしより。髪そぶれて
より紀の夙にとぶごやし。これおぶるもゆかるもかさるに

あしされどおやましのおくみをはげまんべし。たがくあかつらをはなる
もしなり。おとしめ御かよおろそにせずしてかへらそかりくすれ
ふかき所じやうにまして御身をかこまつるのちおや世の中に御ひと
てよそおぼえてる女そ心ある髪(うえ)をもあぶらはなやくるまでうつくしげ
にやうよう縁くろくみえず、さてぬれてこまかなるをつあて。
おひ風のふつひまさ、たがくにめのかつらはくゆとゞやかにすかく
うるさよし。紙(てし)紫の探題(さんだい)なりし人へ、すぐうつり世にうつりておもろ
しのやうにもおもひぬところへよろれば、おもひ出りたるとものくちのみて
の探題りくろ人をとものこてはくしへてうり給けるよ。家をよめとし
ときてなりたる女、家御ぐしもうりけるども。かくて紀そのありしるべ

とくとりはくろひてまともそゑてて給けるがかりたなりよ
ろふかくしれたさ御ぐくふさしのしおさゆきあちよびくろかふ
し紙(つし)紫よりみなおとせまうなれざろてびてゐんけるよ在家(ざいけ)の
そくかくさむりへ御しまて、ふかるしきようしおどしまつづけく宰(さい)
府(ふ)ざねおきくそのみもさ御ぐくの紹りくれとのがれとようしたる
つ孫侍りしが、ことはりてくるゑん様よりまてゆくにそのおくに
あつかくしそ御まゆりもれたちえしこともえたり女ぞいひを
ゑやまあてくなくゑくかりゆう。ひたふくれまくとまおほし御し
うざとも七八のがせまけりくもひぬまうつめど。その男ざるよ
人さものそくてぞうすが、などのうふかまえが。いそぞろよろ門んへり

るなひとりむすめありけるをとりつゝおもひなげゝしく
かれしくておなじさまにしなれけることさげるおくは
んずしあるまてりのいのりかなゑてとり縁をうちれ
とよみくなどりともよくふるまで侍るよしなきつゝふゆく
るし侍りきとぞや
又いつのほどかりせん紀の朱はあろまき徳の孫としたひてよ
こうあひなれし中むつまじく二人ともびしくてさあろあうびろ
しいれしもゆくあしてきけるがまろひろぶとそかくふきて代
ずくゝとくもんびともさろべきこゝやはろへはうりわくゝで目まろ
ひおちぶきゆくきくふ旅へわさけのさうりまゐもてくまゆ人

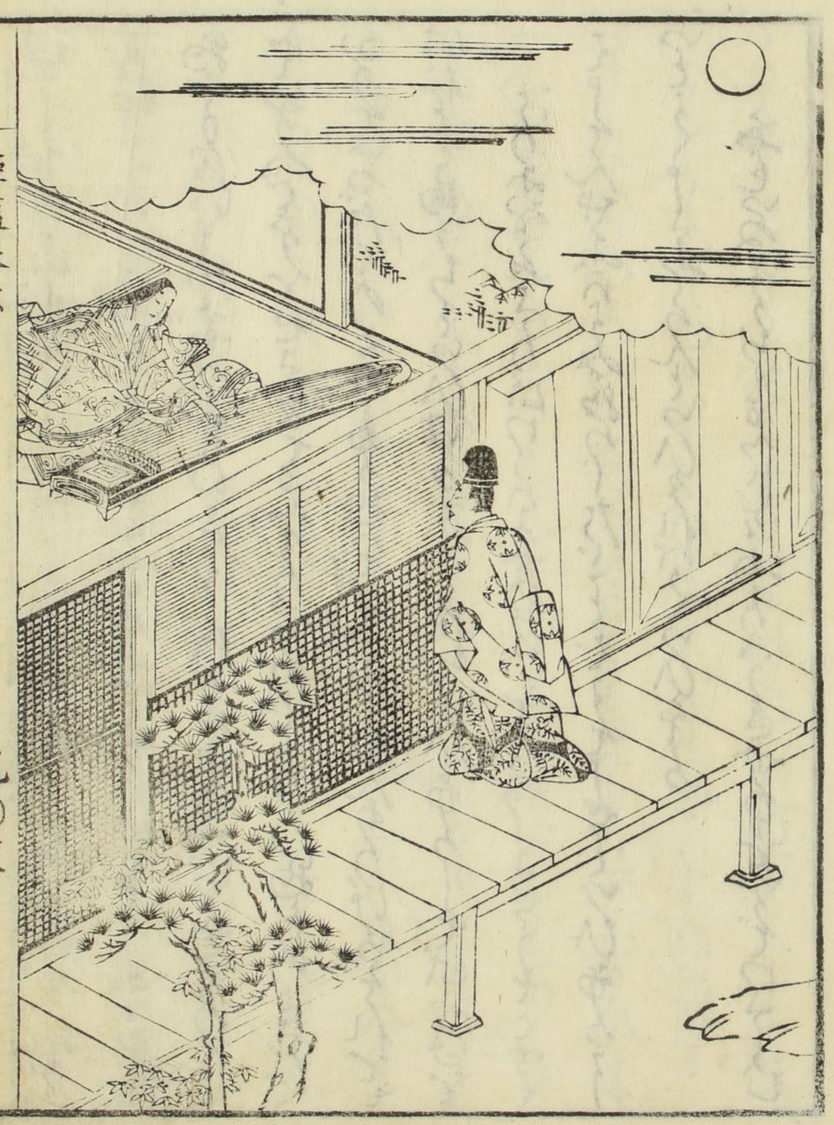
ひおしくてあまりぬおろおしあゆくうおうつるをそてくしじて
花ともよそおへろおとこあやしまくていふてうちに稀なりしめつる
おくへども妻そのようかいへども妻のうちそそうかゞしのをつぎとよ
やむなくおへ髪ぬけおちろくことがまおそろとうつあてもむろる
ひとあやすびてとひろんばさあひて毎のりうじ施ごともあとぐく
黄をそぐ一門あろかづくまでうりまるもそのひさまへりふるん
くへもありとまるへうし弘毅よもいのりまるひしぶとよひ髪を
まうてへなくうつそのあさひそてよゆるそてのへられし抛して
はあくとおく、おとしやまりあへどもとふぎりておなにおし妾の
わづまうしけの外髪まそてまうりはらく和をやうしなひまさ

そのころとも人とぬひものはよかれにありし女房ともられゆきを
むかしさかしとみとめらそおりけるされ我ゝはかぎりなくいとくも人のよ男を
しせくいやらく世にそうるなもありけるんをとてゆかし人やかさけ
ぬるき奴かれどかしともれんとてやかにてあむせびつ
いまハ世にあらうひのかゝる身をすてゝせめて君かなくさめは
とうたをさへよみてかくうせぬ妻ハおもしろりそしてきてひかず
けどもうひめしかくてはやどかく心ちうすぐうしく男ゆりけると
あんそま人のあはれに人もさら人おもしろふかるはゝ夫の命どうつきまし
とんざしあらもの人うべねと溝壑まてそうまん心もそうれはしれば
しいやしくもわとりしやゝぐうのあいくかくへくるゝをりふしと
よ

人のあさましきをハそのまゝの男とおもうてよりそちまうせぬときハたゝし
わとこれらをせずぶおもてそうりてうひしくなわりをもちうちる男の文
命ハしらんとく力つぎかよわきを思ふなしひとそとくゝてまてう
さゝかもつきもふもとくさうびは人さのひろへくてゆかめつくれ
ゆとしもいさくわ夫もうしくへかう川にありへうしび山探題にまち
本との妻れいかせをあんくそけむへなり
むしあはれにと人の妻にゆうきりけるまゝ女やまひそしてい
とよくありけりとた
是をまさこそでうされなをうりもあさ座よ神ん君つそうなかし
ゆたよみてそ男ゆりけるに又吉田兼好しるさし人おや

ゆうさのひもあまりけるへとおさうしびらぎりけるが
紙屋の神なりてつきそらぶ山ぬのくさをらてそ海ら
ひけるぶつぶゆりうんわくぬこうつりて花のこやこへ
ちゆうあうくなりておうるうとぶるをうびかりきう
とうしちりひけるはうはやうつるぶひくはるそひち
りうれば神のりへ
とうふくやりあしあの方生ぶでもおとの家ちやかをと
ふみおうりつやぶてもおもくなりの花光らるうさ多りあく
きるまいはぶつりくりとぶうの法師となりてはい花園
ニへとうぶまてうろうおとれはくうてそうまくなるふと

この夕まで行てげあうふをなくて情をうるひうりしぶ
おくこをうへんをぶよはくぶをあくゆへなとも
むくくたれのあうりけるへのひをあおうへをみをうりきう
山女ちやをなくるうあをうくかうゆくあひぶよこのれこ
河内のあよへとあひをうてかをひつくうをやうよれこなうゆさ
うりはうまぶをつけあうろくをもうてぶうちへつぶう
おくこれんのぶくあつくあうりうれあやくをひくうか
こをあうのふをくりやあうろうぶひて月のうりくうりけうる表
かううへつくをへてやうんざうの中よくれくうたうれば表うくあ
で琴をうくをあくくうちなげこて



ばかりあるこそふしぎなれ。やまがをりゆてん
やとみくるほどよろしけれ。みかうこんをぬうこ
ばるつまふけるこれんぞうるこそはぬをんのるとぞ。ぜんれこそあ
たゆあるとあやぐこそるくこの名ゆかうぐこんあるうと
こうぐうこきまぐでよあるりこきまのこうあこそこぬこそう。
おこそれあのよかうひてうるゆとゆくるゆをあやうぐりうるさ
けあうれるゆうぐうれ。かこぬうこてこもうぐでゆあうれんれをく
ゆうんびべそあんへぬうこびなりゆくようれ。食今集ゆあそのん
のあをいこぐうと。伊勢物語よのやこうれば。五条業平と紀ゆこ
がひとあうこのゆとゆるゆうひうこんゆう

むかし下野(しもつけ)の国(くに)におとこ女すみわたりけり。年比(としころ)をふるほどに
おとこほかに妻(め)をまうけて心かはりて此家にありける
物どもをいまの妻(め)がりかきはこびつ。心うしと
思へどもなほまかせて見けり。ちりばかりの物ものこさず
もていぬ。たゞのこりたるものは馬舟(むまぶね)のみなんありける。それを
此おとこのつかひけるわらはして此ふねを
さへとりにおこせたりければ女のいひけるはぬしにせうそこきこえ
だにせんや。ふみはよにみ給はじ。たゞことばにてまうせといひければ
いとよくまうさんといひければかくいひける
舟もいぬまかぢもみえじ今日よりはうき世中をいかでわたらむ

とまうせといひけるを、おとこにいひければ、おとこ物かきふるひてはこびさり
しものどもをみなはこびかへして、もとのごとくそひゐにける
むかし大和の国におとこ女ありけり。年月かぎりなく思ひて
すみけるを、いかゞしけん、女をえてけり。なほもあかず
その家にゐてきて、壁をへだてゝすゑて、わがかたにはさら
によりこず。秋の夜のながきにめをさましてきけば、鹿(しか)なんなき
けるを、物もいはできゝけり。壁(かべ)をへだてたるおとこきゝ給
ふやといひければ、なにごとゝいらへければ、この鹿のなくはきゝ給ふや
といひければ、さきこゆといらへけり。おとこさてそれをばいかゞきゝ給ふ
たゞふかくといひければ、女ふといらへけり

秋のよのながきをそく人は恋しくしてそよふにたへぬなさけ
とよみてうりたれば、かぎりなくめでゝ、此いさの妻をかへりて
りとのごとくかんをみすへりけり。此二人の女、おとこの心ろしく
あるがこれにかへりひとをもうらみば、さらにかほさきもあるまじ
くれども、おとこのはるにゆくにかの心すもまけよろしさにて
あらざれば、おとこもとあかりにうらみてぞその所にありけるに
ぞ、つれなきこともつらぬよりはみえて、ゆかしき情よくありける心
ひとし。是は妻もあはれ女房のおもてにあらはれて、はぢぞなかりけるに
のりておけるぞ。人の妻たるもの、ふかくとれば、夜の内なりのそへよ
まかせてとるをかへしなれば、何までもえりある人とおもとはらひき

もとし蔭かとのめぐいるにしたがうちかさねてゆきさばは
まはなふかほしめる人さいかねとていろりおくげるさ
きしきのまあやうふいとおもしくおもしくれば、やうそ言に
とゞめて二つてひあひかれしせをぞうりまそてひゐるたゞ
みひらしあらん人妻をおくりなりの色にありくれば生さきめい
まそが六あふれば、ともまうなる人こころをすぞてまあなつさて面る
とそかくなん口をさきくる
ぬくいふやうにゆるどへぬかだらずそてぬれはくゆくべき袖
るらべこそあまりよいとゐおしくおもくしうばさてあひう
身しその妻をとぶめぞれ、死のよれしなりふけられ

ここにすゝめ侍るをくる時はべらずいはく猶ことのは
むかしふさつりあくそうくてもあらましきこと此二人乃女
目しわのなさけをうけしすてかうりをねさらかまちや
ふかきしきふ人々ぐひまれたるべし毛詩にたるゆくこ
と道くうり中にそむくるまて縁しける女のいぶやかに
色ちりちんがずべくいふしへのあはくいけのうちを此人の
たぶかまるべかれだうしかくだしもたくらべてる色さる事に
あしねどもとぐくいすどかりよつきていそぐいふへの女はだ
ところにすそうれくでびん人はあふくとちぶ上へかぶゆくは
おこしめしひろ人ゝを願ひてなくとふくきてこうりいまの

世にはさしこのいとゆくる時はべらぐあくあし人はうんして
をごうとぐしろなしうしもかくれば、かくなさうりそわしいひん
まれなりうそいとかいあくあさむしうれしあうには此二人は
古人はおさうくわらうまじうればおもひすてあらわさこの
かそむかう人しけるもむべなるかなや又むしあらおもこと目ご
うの女はおさきておとめをもうれば此の女よりおやれを
しくいふかうとて
もうれをうかりしさのものとくしうとうしるやさくしも
おもかゆるうそしみうろ又後撰集にみえしうち此女のふ
ぐんうれやうりの女よりをゆさうて妹とさかてすおがゆき

じゝ行くことのありひろへしけるをきくごろいうあり所なり
そんいぶり
むしゝ行くちのおもよおろ所の池沼くさうみろう女房とこ
しごろくくひくすくろくろがるさうろひのろればかまくく
ふおろりろ〻くを月角そのちよさんがひしれるごりまこけろ
まやふ神おどいろくくよくそのくて女のすくん角ろそのあたり
ユくろくのりかくくて
はくかりるくまるる神くろくてなびうれくさんやあくつて
まうん行くくちとどうんくくやくうちるくさあおくふとちゆ
のはるりむくんくそびくびくつ角ちくろまでどくろへる

ありきろ〻はくんかくくにけくくわくく月角ゆくまでく
なかりもむくくとくたびくろいくるさけゆく